

歌誌 黄雞「秋号」投稿歌

山形 黒沼 貞志

歌題 ころのバリア

痛む腰宥めつつ通う院内は我も溶け込む多老化社会

亡き母の形見の日記読み耽り誕生月の進まぬ断捨離

病得て己が余命を公表す知己の想いにわれ寄り添えず

震災忌風化の兆しの九年目車窓の向こうは春めくフクシマ

一本の桜に集う人々の想いそれぞれ城址の春日

花びらが流るるごとく散りにけり老いの桜樹春行くままに

つくづくと己が狭量を思いたり妻との日々の会話の端々

飛来して実を啄ばむ鳥ありキアロニアたわわ雨白ふ朝

情報が表も裏も溢れおり読み手のちから問われる時代

バリアフリー携わりてはや二十年漸くブレイク「ころのバリア」

入道といわしの雲の鬩ぎあい起し初秋ゆきあいの空

夢求めビルの谷間を縫うようにゆりかもめに乗りビッグサイトへ

ハイキング帰路で戴く芒の穂わが家に移して秋もうひとつ

連れ合いと紅葉三昧秋ハイクカメラに収めてテレビで再現

三百坊静かに佇む石鳥居風雪耐え抜き歴史の語り部